

平成16年11月10日

原子力開発に関わる要望

名古屋大学エコトピア科学研究機構
教授 榎田 洋一

1. エコトピア科学の観点から

地球規模での資源枯渇および環境問題を解決し、豊かで美しい社会を将来にわたって持続的に発展させていくためには、これまでに培われた科学技術基盤の上に人間と自然が調和した一段と新しい価値の創造をおこなう必要がある。地球環境負荷を低減した**環境調和型の循環・再生社会**は、21世紀に目指すべき社会であり、**エコトピア**とでも呼ぶことができるものである。このためのブレークスルーとなり得る新しい科学技術の創生に向けて、材料、エネルギー、環境、情報という先端基盤研究と横断的総合研究が国際的にも求められている。これは将来の核燃料サイクルのあり方に関しても例外ではないと考える。

2. 将来の核燃料サイクルに関わる技術開発目的の明確化

「二兎を追うもの一兎を得ず」との格言があるが、核燃料サイクルの技術開発の目的はそうであってはならない。然るに、「経済性の向上」、「核拡散抵抗性の向上」、「社会需要性の向上」、「マイナーアクチニドのリサイクル」、「学術発展」、「人材育成」、「技術伝承」等が同時に謳われており、多目的すぎて目標達成度の評価がわかりにくく、制約ある人的、金銭的資源の無駄遣いを助長していないかという点が気がかりである。エコトピアでは、何でもリサイクルすべきであるというのではなく、技術の目指すところを社会学的な観点から見直すことが求められる。一例を挙げれば、群分離や核変換による放射性物質の処理については、現実的評価を行い、当面の核燃料サイクルに関わる技術開発から切り離す必要があると考えている。すなわち、**核燃料サイクルに関わる技術開発の目的を端的にし、人的、金銭的資源の集中投資、有効利用を図るべき**である。

3. 「もんじゅ」と「リサイクル機器試験施設」の位置づけの明確化

「もんじゅ」は平成7年12月の2次系ナトリウム漏洩事故以来、現在まで停止中である。また、「リサイクル機器試験施設」についても、1200億円といわれる資金を投入して完成を意図していたにも拘わらず、建設は完全なる完成

を待たずにおり、利用の具体的姿が見えていない。これらの施設の位置づけの明確化を図り、責任ある方向性を示すべきである。すなわち、**これらの施設を「早期に再開するとともに改造・拡充を図り集中的な研究開発拠点としての整備充実を行う」か、あるいは、「廃止措置までの期間を含めた将来計画の立案を行う」かを決すべき**である。

4. どっしりした原子力開発を期待

環境調和型の循環・再生社会を目指しつつも、技術専門家だけではなく、経済学、社会科学等の専門家から見ても合理的な将来の原子力開発を実現するための重みのある原子力長期計画の策定を熱望するものである。その中で、複数のオプションを許容しつつも、限られた資源の集中投資により、計画で予定した期間内における成果の実現性をより重視する方向を考慮していただきたいと考える。また、新しい議論により、既に存在する設備の有効利用を適切に図るよう希望する。

以上